

続日本紀(6)16P

続日本紀(1-12~13頁)

④ 4540-3/2 同文
⑤ 4711P 同文

原文を見ること!

④ 4540-3/2 末 4705?

次頁から

もう一つの高安城
たかやすのき

高安城にまつわる数多
たかやすのき

くの不^ふ可^か解^{かい}な記事について見てみることにしよう
13.5 Q1

先に述べたように「^{13.5 Q1}ヤヤノイイ記事」
すてに

(六九八)八月二十日条に、
たかやすのき

高安城を修理す。天智天皇五年の築城な
たかやすのき

リ

とある。

高市天皇(天智称制)の五年(六六六)
たけちのすめらみこと

に、高市天皇は、大倭国(肥後国)に高安
たけちのすめらみこと

城^きを築城されたのであろう。(第八十三章
やまとのくに

大倭国(肥後国)の高安城の項において
たかやすのき

既述)

$$\textcircled{5} 4712^3 - \frac{1}{2}$$

4540-1/2 4,707
 遠の報 4569 4631 4533 4540 4562
 白村江 1775 4540 4562
 4540-1/2 4,707

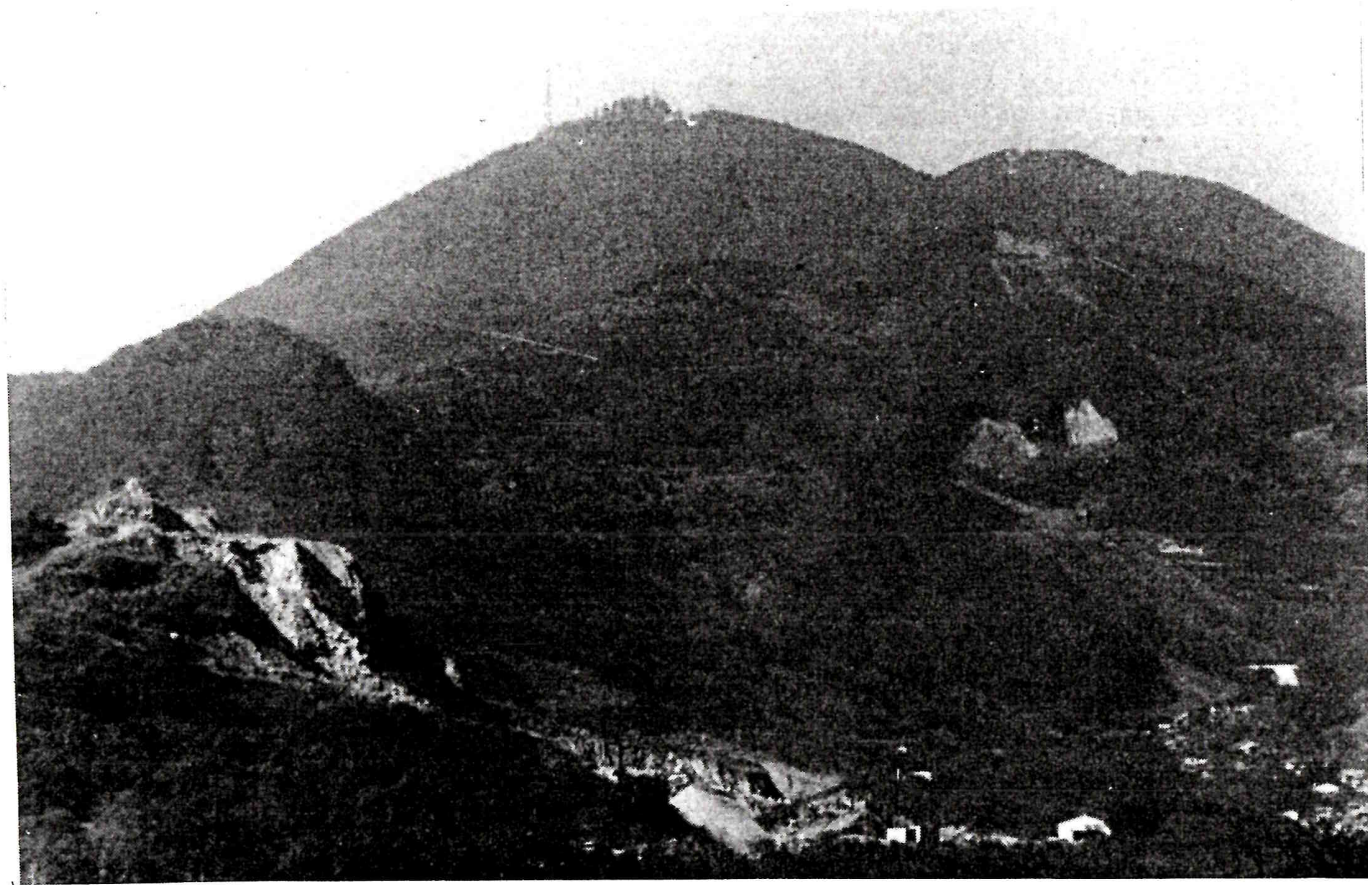
201

へ生駒山塊南端部の高峯曰高安山（四
 ハハ）に相当する山、つまり、熊本
 県の熊ノ岳山塊南端部の高峯曰（現在の金
 峯山）のことなのであろう。金峯山の三角形の山頂
 と想像される（第14回 写真四版）へ金峯山（参照）
 天智称制二年（六六三）の白村江での敗北
 以来、唐・新羅軍の来襲に備えて、大倭国（九
 州）では水城・大野城・椽城・鞠智城等を
 築き、そして大宰府の都（遠の朝廷）や崇福
 寺などを建設してきたのだった。
 男等の多くがこうしてた勞働に駆り出され、
 残された女達は男達のいない分まで働いて、
 九州中の民が疲弊していったに違いない。
 なるほど、敵の軍船が、玄海灘から天草灘
 へと迂回して来る場合も予想される。こ
 とではあったろう。猛攻撃
 いかしなから、人々のこの窮状を考慮して
 大倭国（肥後国）の高安城を修築すること
 しばらく延期されたように推察される。
 こいまで、天智天皇に多大の恐怖を抱いて
 きた者達も、——その意外な決定に、感歎し

寛大な処遇に

伊勢 21行

タ
フ
リ



写真図版 〇 ^{かみぐまもと}上熊本から見た ^{きんほうざん}金峰山 (665メートル)
 ・ ^{さんちやう}山頂には、南北朝時代に ^{ききうち たけしげ}菊池武重が ^{かんじやう}勧請した ^{やまとのくに きんぼうせん}大和国金峰山の ^{ごおうぎんげん}蔵王権現 ^{まつ}が祀ら
 れており、この山名の由来になった。 (「熊本の山」今江正知編著、熊本毎日新聞社、
 84頁参照)

その根も乾かぬうち 982
④4706 1497

天智 改行
4,708
④4705

甚だ 1809

市 4941 税金
④4709 8
紀下373

大いに喜んだ。というところなのであろう。
■それなのにどうしたわけか、その同じ年であ
る天智紀八年（六六九）是の冬条に、
「是の冬に、高安城を修りて、畿内の田税
を収む」とある。
・なんと奇妙で理解しにくい。この記事は、
大和国の高安城に関するものであろうと考
えたい。第51回 写真版 734・735 高安山 参照
二年前の天智六年（六六七）十一月に急
遽築いた大和国の高安城は、あまりにも手狭
であったため、天智八年（六六九）の
冬に、その規模をもっと大きく修築して、畿
内の田税（蓄積された田租）をそこに収めた
という意味であらう。と観察される。
■まさか、天智八年（六六九）八月三日に、
人民が疲弊してゐるのを哀れんで、大和
国の高安城を修造を中止し、その仁愛の
徳をほめたたえられた。というのに、
舌の根も乾かない。その年（天智八年）の冬には、もう先の決定を

4.708^P-2/4

- ・カラー
- ・右頁の上に載せる。
- ・左右を限度一杯、
はみ出させて下さい。



- ・著作権許諾は不要です。
(支払い済みです)
平成30年(2018)2月26日付、
現金書留で送付しました。

↓
カット

↓

12Q4 14Q4 写真図版734 やお 八尾飛行場から 東の「高安山」を望む
りょうせん のぞ
・ 稜線の中央部、白い鉄塔近傍に山頂がある。

12Q4 大阪市阿倍野区あべのくの加藤芳樹氏、平成30年(2018)2月撮影
726 金峰山前きんぷくさんまへ 生駒山なまけ 4007P
高安山 4541.2/2.104

・カラー

・第○図 (④4125^P-3/2) を

北
コピー (17下さい)

・左右へ限度一杯はみだして掲載下さい。
(右頁の下半分に掲載下さい)

＊昔々このあたりは
海だった
八尾市



やまとかわ
大和川

おうみ
心天皇帝陵

石川
かわ

かわら
柏原市

たかいだ
高井田

たかやすやま

④4125^P-3/2 → (第○図と同一)

1409 第511図 高安山・法隆寺近傍図

※昭和42年7月30日付、国土地理院発行の5万分の1地図「大阪東南部」参照

4,708^P-3/4

林不要 ↓

④4125^P-3/2
④4708^P-1/3
生駒山近傍
④4086^P-3/1

まつおやま
松屋山
316m

平ヶ
群り
谷

たかやす
高安山
488m

きん
信貴山
437m

たつた
龍田川

法隆寺

たつた
龍田

斑鳩
町

たつた
龍田川
322^P
(みきと) ← 地94^P 1479^P
三郷町

立野

しめがわ
富雄川

④ かわあい 川合

④5041^P-3/2
ルビ

④5031^P

今泉

④4126^P-3/3
ルビ無

生駒山に登る
④4940^P 16^P

727^P

4,708^P-4/4

・カー
・左の
上半分ト
掲載下
さい。



13Q4 半字
やお 陣 太や味

14Q4

写真図版 735 高安城倉庫跡、礎石群

『八尾、高安山史跡散策マップ』 八尾市教育委員会文化財課 平成24年(2012)3月31日発行 又頁参照

ひるがえし
へ無慈悲に
引に働かせ、山上の高安城を修築して、田税をそこに収めさせた。
というわけではあるまいが、と思われ。何とも不審なことに、天智紀八年(六六九)是の冬条に、
「是の冬に、高安城を修りて、畿内の田税(田租)を収む」と述べた二、四ヶ月後の一一、天智紀九年(六七〇)二月条にも、
「高安城を修りて、穀と塩とを積む」というのである。
この物語でしばしば述べたように、
出でない」とすれば、この天智紀九年二月条の記事は、大倭国(肥後国)の高安城について述べたものであらうと思われる。
つまり、天智八年(六六九)八月三日に、民が疲弊して、いるのを哀れ、高安城を修らなかつたとはいえ、
半年後の天

H5.9.15(水) ㊟
→ 菊5/20日

4,710^P

㊟4724

㊟

智九年(六七〇)二月に、その疲弊を承知で
あえて人々を使役し、高安城を修り、穀と塩
とを蓄えた、ということになる。
■それなりの理由があつて、大倭国(肥後国
たかやすのき)の高安城修築が急がれたのであろう。
■とについては、追つて思うところを述べたい。
(第八十四章) 郭務^{かくむさう}惊^{おどろ}がもたらした恐怖^{おそ}の
項において詳述^{しやうじゆつ}する。

米

㊟

続日本紀 6, 10^P 535 4712^P 2/2
(回)
④ 4705^P 同文

続日本紀(6) 10^P

4711^P

④ 4540^P 1304^P
こいちはい、ゆきちがい
→ → → → →

次頁
から

また、日本書紀にだけなく、
日本紀にも、おかしな記載がある。
① 文武二年(六九八)八月二十日条に、
「高安城を修理す。天智天皇五年の築城な
り」と記されている。(既述)
② ところが何と、その一年後の文武三年(六
九九)九月十五日条にも、
「高安城を修理す」とある。
一連のものならば、文武二年条およ
び三年条に分けて記述する筈はなからう。
思われる。
なるほど明確に述べられてゐるわけではない
が、あるいは、

前頁

698
668
32
④ 4705P

④ 4540 3/3
④ 4706P

699
667
32

4712P - 1/2

④ 5214P

統紀(白) 1-26P

統紀(白) 1-97P

統紀(白) 101P
④ 185P

次頁
から

やまとのくに
(1) 大倭国 (肥後国) の高安城は、高市天皇 (天智天皇) の五年 (六六六) に築城され、
三十二年後の文武二年 (六九八) 八月二十日に修理され、
(2) 倭国 (大和国) の高安城は、天智六年 (六六七) 十一月に築城され、
九年後の文武三年 (六九八) 九月十五日に修理され、
さ小た、
といふことなのかも知れない。

732P

12

統紀(6)1-101¹
(第)1-185

年代は元禄迄未の表
④4713

4,712² - 2/2

統紀(6)1-97¹
(第)1-179¹
年代は元禄迄未の表

統紀(6)1-26¹
④5214¹

前頁

に不可解なことが記載されている。がある。
(1) 文武天皇の大宝元年(701)八月二十六
日条に、
「高安城を廢して、云々」
とあり、
(2) 元明天皇の和銅五年(712)正月二十三
日条に、
「河内国高安峰を廢して、云々」
とある。
・ たかやすのき、
「高安城」は完全に廢絶された。
(3) とうけい印象を受ける。
銅五年(712)八月二十三日条には、
「高安城に行幸したまふ」
という、理解し難いハ筋の通らないことが述
べられており、
「廢絶」

733¹

新開切抜き
ナルー 3/4 ほど

701 4711⁵ 5行
698
3

前頁69

改行
4712³/₂ 4713¹

存続^{ぞんぞく}で論議^{ろんぎ}を呼^よんでいる。(「朝日新聞」
昭和五^じ七年四月十日付参照)

この物語では、こう解^{かい}いてみた。

①大倭国(肥後国)の高安城は、高市天皇^{たけちのすけのみこと}錦

明^{あき}天皇^{みかど}が築城^{ちくじやう}された重要な山城であるとした

れ、文武二年(六九八)八月二十日に修理さ

れたが、しかし、所詮^{しよせん}、大倭国(肥後

国)に存続^{ぞんぞく}できるものではなかった。そこで

三年後の文武天皇^{ふぶてん}大宝元年(七〇一)八月

二十六日に廃^{はい}された。

(2)倭国(大和国)の高安城は、文武三年(六

九九)九月十五日に修理され、元明天皇^{げんめいてん}の和

銅五年(七一二)正月二十三日に河内国高安

城^{とよひ}が廃^{はい}された。とはいふものの、高安城^{たかやすのき}その

ものは長らく存続^{ぞんぞく}することとなり、

元明天皇は、和銅五年(七一二)八月二十三

日、高安城視察^{たかやすのき}のために行幸^{ぎやう}された、

と川^か次第^{しだい}ではなかつたろうか。

なお、大和国高安城の倉庫跡^{くらぐらあと}の近くで、

七三〇年(奈良時代中期)頃からみられる

令和2(2020)6.9(水) ~

6/11 下6/10 6/10
H9.4.14(月)
S63.12.23(土)⑤

⑤ 4706^P 4.714^P

前9所~

平城宮で用いられた直径三十二センチもある盤(皿)大四(おおいさ)六枚が出土した。

■そこで、

文武天皇の大室元年(七〇一)以後も、大和国(たかやすのき)の高安城(たかやすのき)は存続(ぞんぞく)していたのであろう。 (「朝日新聞」昭和五十七年四月十日付参照)

米

■こうして経過(けいかり)を考える時、高安城(たかやすのき)は、大倭(やまとの)

国(肥後国)と倭国(大和国)の両方(りょうほう)にあつた(た)よう(よう)に思(おも)われる。

■そして天智八年(六六九)八月三日に、高

安(やす)領(のり)に登(のぼ)って協議(きぎょう)し、高安城(たかやすのき)の修築(しゆしゆ)すること

を中止(ちゅうし)した時(とき)に、天智天皇(てんちてんかう)や中臣(なかつくみ)

鎌足(かまたり)を始(はじ)めとする大宮人産(おのみやひとたち)はまだ、大倭国(やまとの)

倭国(やまと)に留(とど)まっていたこと(こと)であらう、と想到(しんとう)さ

れる。

米

紀下372^P 井上(生)278^P 臣人せ 1943^P 4,715^P - 1/2

中臣鎌足紀下321^P3行 次々頁上は 藤原内大臣 紀下371^P
紀下371^P1232 紀下372^P 手は、7.8.9月 紀下369^P 紀下370^P

鎌足かまたりの死し

天智紀八年(六六九)是この秋条あきに、

藤原内大臣ふぢはらのうちうまへつきみの家いに霹靂かみとけ(落雷らくらい)せり

とある。

・もつともこの時、中臣鎌足は、日藤原内大

臣ちになく、
なお、追って述べるなかとみのうちうまへつきみようは、
中臣内臣なかとみのうちうまへつきみになつた

へこの頃、中臣鎌足は、病やまいを得て、
と馬うまもしくは高たかい所ところから落おちちてか床とこに臥ふする

せる日々ひびが続つづいていた

ようである。

尚なほ、秋あきは、この当時とうじの暦こよみ(陰暦いんれき)で、

七月、八月、九月をいう

同年どうねんの十月十日条じゅうがつじふにちに、

天皇すめらみこと、藤原内大臣ふげのうちにの家いに幸りいて、親みづから所ところ

患ひを問とひたまふ。云々

とある。(紀)

45.7.17(4)
49.4.14(A)

4.715^P-2/2

#上下218^P
宇治F 219^P 紀下372^P

すなわち、天智天皇は、中臣鎌足の家にお
越した。親しく所患を見舞われたのだ
った。

しかし、中臣鎌足の憔悴があまりにもはな
はだしいので、天智天皇は詔し、

「天の道理が仁者を助けるといふ道理に、

は余慶があるという文の、善行を積む者に

さないうことがあろうか。もしなにかい

てほしいことがあつたら、言うがよい」

と仰せられた。(紀)

中臣鎌足は、

「私のような愚か者に、いまさら何の申し

上げることがございましょう。ただ一つ、私

の葬儀は簡素にして頂きたい。生きては軍国

のためお役に立たず、百済救援の失敗をさ

すか、というが不明」死んだ後までどうし

て御迷惑をおかけすることができまいようか

云々

と言った。(紀)

紀下373 1218
第=印 730
あふみ 近江(淡海) 紀下366122
あふみ 4718 581
紀下372

4.716^P-1/2

4715^P-1/2
前2694
前266行と日 藤原内大臣
あふみはらうちつまつま とあ
紀下372 天智8年10月15日

天智紀八年(六六九)

五日後の十月十五日条に、

天皇、東宮大皇弟を藤原内大臣の家に遣

て、大織冠と大臣の位とを授く。仍りて姓

を賜ひて、藤原氏とす。此より以後、通して

藤原内大臣と曰ふ。

天智天皇は、東宮大皇弟(大海人皇子)

を中臣内臣(中臣鎌足)の家に遣わして、大

織の冠と大臣の位とをお授けになつた。また

姓を賜わつて藤原代とし、以後、藤原内大臣

と通称する。

とある。

そして、その翌日の十月十六日条に、

「藤原内大臣薨せぬ。日本世記に曰はく

云々」

とある。

(紀) 藤氏

なお、家伝には、

「十六日辛酉、薨於淡海元第(邸)。時年

五十有六。上哭之甚慟、廢朝五(九イ)日」

と取り敢えず 1624^p 華智城 早馬 1819^p
計報 1959^p 22の13世 4698^p 2/2

4,716^p - 2/2

紀下 372^p 未319^p

天のき
改行

と記されていいる。

もーかーたら、

へ藤原内大臣は、

は大宰府の邸に於て薨じた

のかも知れない。

そう思わせる記事がある。

のように記されている。

天智紀八年十月十九日条に、

「天皇、藤原内大臣の家に幸す。

我赤兄臣に命いて、恩詔を奉宣ふ。仍、金

の香鑪を賜ふ

とある。と記載されている

とある。と記載されている

(1) 藤原内大臣が十月十六日に薨じた

う知らせは、早馬によつて、大倭国(肥後国)

の鞠智城においらでになる天智天皇のもとへ伝

えられた。

(2) 天智天皇は、その計報を聞くと、やいなや馬を

けつて北上し、藤原内大臣が死去して三日

後の十月十九日に大宰府の藤原内大臣の

4634^p 17行

娜大津(もくは)

力夏に

の娜大津ある

筑紫

H 29 (2017) 5.30 ~ 6.7 (水)
H 30 (2018) 11.11 (P) ~ 11.12 (4回)

解読 4715^p - 1/2 659
かちとけ

下

4,7/7^P

紀下370^p 末3^p
4698^p - 1/2 425^p

家に幸された。

(3) ここに、天智天皇は、

リ天智八年の一月九日以後、
是の年(つまり

う地位にある蘇我赤兄臣に命じて、
鬼みある

詔を読みあげさせになった。

という経過があつたのであうう、と推察さ

る。

なお、蛇足ながらあえていえば、
藤原内大臣が、

西の筑紫率である蘇我赤兄臣が、
邸で蒙じ

る詔を奉宣うた。

とすれば、かなり怪訝な顔をして、
とにもあれ、この物語では、

へ藤原内大臣は、大宰府で蒙いた。

と解釈してみたい。

郷大津(もくは

と解釈してみたい。

と解釈してみたい。

と解釈してみたい。

と解釈してみたい。

と解釈してみたい。

と解釈してみたい。

と解釈してみたい。

あち 小材 743^p
紀下 372 頁 20 嘆息の語
扶桑略記 62^p にもある。05
4,718^p - 1/8

紀下 372^p
4716^p - 1/2

鎌足の死因

天智紀八年（天武九年）十月十六日条には、
日本世記（高句麗僧道頭の著）に曰はく

とて、次のように記されてゐる。

藤原内大臣、春秋五十にして、私第
に薨せぬ。遷して山の南に殯す。一、一、一、
碑に曰へらく、春秋五十有六にして薨

せぬといへり
とある。

扶桑略記に、
天智九年庚午閏九月六日。大織冠内

大臣改葬山階精舎
家伝に、藤氏

以庚午閏九月六日、葬於山階精舎
とある。

多武峯縁起
には

長津の阿武山に葬った後、大和国の多武
峯に改葬した

とある。
朝日新聞 昭和六十二年十一月三

写真図版 736 阿武山 写真図版 741 談山神社（多武峰社）

Spilo 4717^p
562, 11, 13.

4, 718^p-3/8

あぶやち 朝日 主のた人 574^p 281^m Spilo 4717^p
阿武山 425 (2013) 警嘆 整って人に好む 車側山腹 H1.12.22
12.13 金 4681 1/2 4738^p

日付参照

(*)

東北から西南へ流れてくる淀川寄り

淀川北岸にひととき秀麗な姿を見せ

る阿武山(二八一^m)の東側山腹におい

て、終末期の古墳である阿武山古墳が見

い出されたのは、昭和九年のことであった。(写真図版 736 参照)

京都大学地震観測所の地下実験室工事に伴

い発見されたこの阿武山古墳は、直径ハ

十ハ十四^mの円墳で、地下三^mに横口式石

槨があった。麻布を漆で塗り固めた最高級の棺

の夾紵棺内に、豪華な副葬品をまとったあ

お向の遺骨が残っていた(写真図版 737 参照)

このため、貴人の墓だと一ツ大騒ぎに

なった。

なお、この地域に七世紀ごろ葬ったと記録

されているのは、藤原鎌足だけである。多武

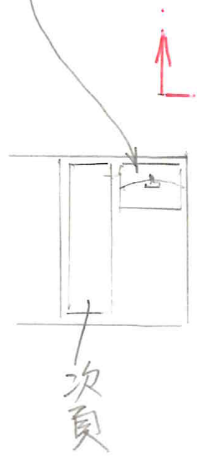
峯への改葬説はあるものの、五十年前

に歴史学者の天坊幸房氏、最近では上山春平

カラー
右頁の右上の左右を限度一杯はみ出させ、

4,718P-3/8

大きく
掲載下
さい。



文字がにじんで
います。入力に
下さい。南
(太いゴチ)

入力お願
い
します



阿武山古墳 地震観測所

カット
↑

北
↑ 入力お願
い
します

中心よりかけ
140G
ゴチ

写真図版 736 阿武山古墳遠景

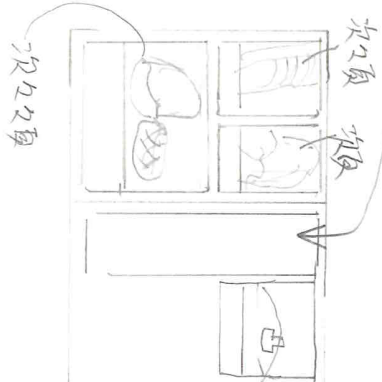
(大阪府茨木市阿武山)
110G 右つめ

上

・右側の左側

・上下を限度一杯
はみ出させて掲載
下さい。

・上・下を間違えないで
下さい。



4.718^P 4/8



中ハミリハナ

1409

写真図版137 棺の内部

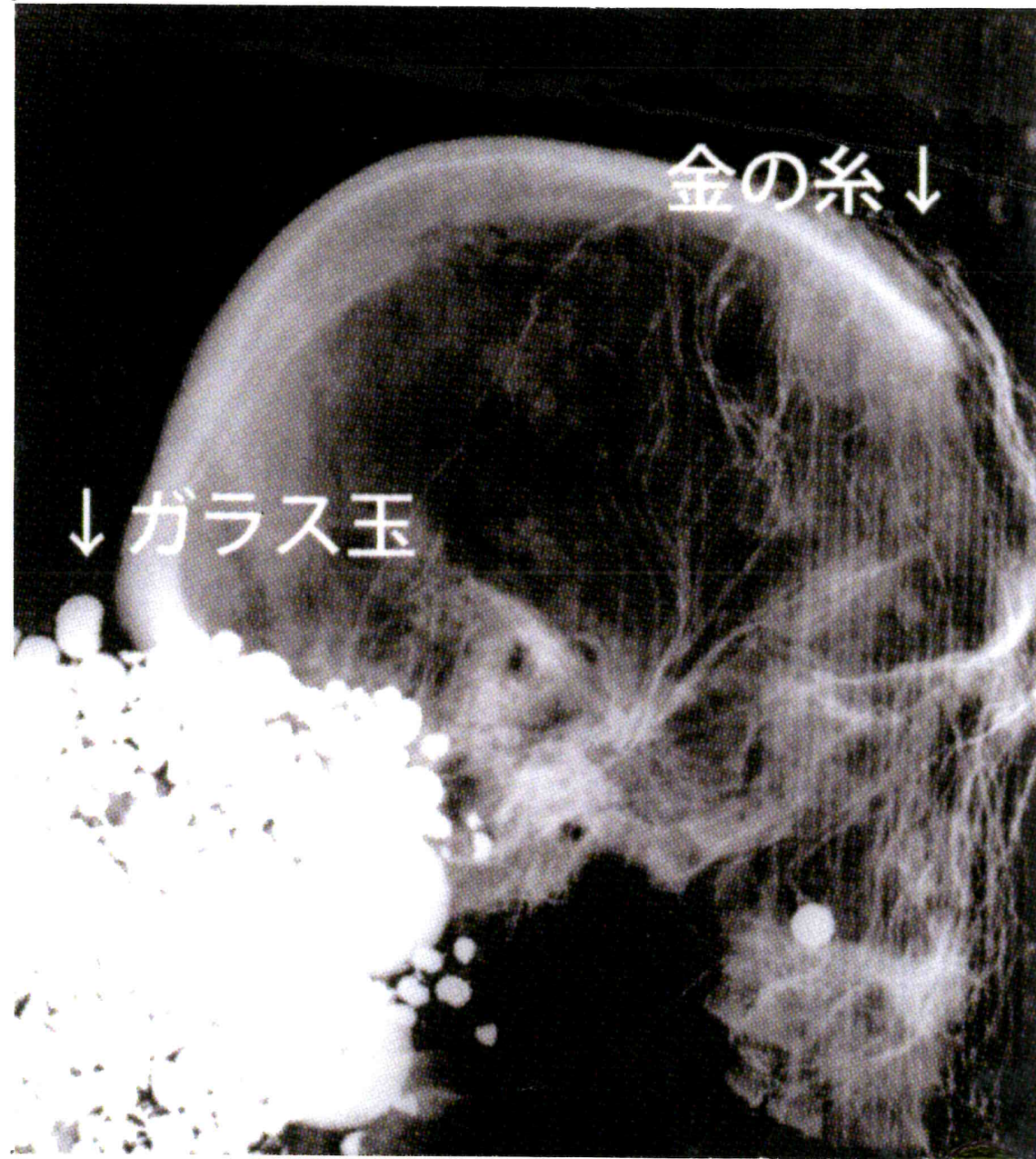
中ハミリハナ

1109

写真：京都大学総合博物館

4,718^P-5/8

・左頁右上(1/4頁)に
大きくはみ出して掲載下さい。



中心ふりかけ
14QG ——— 写真図版 738 ^主金の糸と ^{たま}ガラス玉
中心ふりかけ
11QG ——— 写真: 京都大学総合博物館 745^P

4,718^p-6/8

・左頁左上(1/4頁)に
大きくはみ出させて掲載
下さい。



骨折した肋骨と脊椎

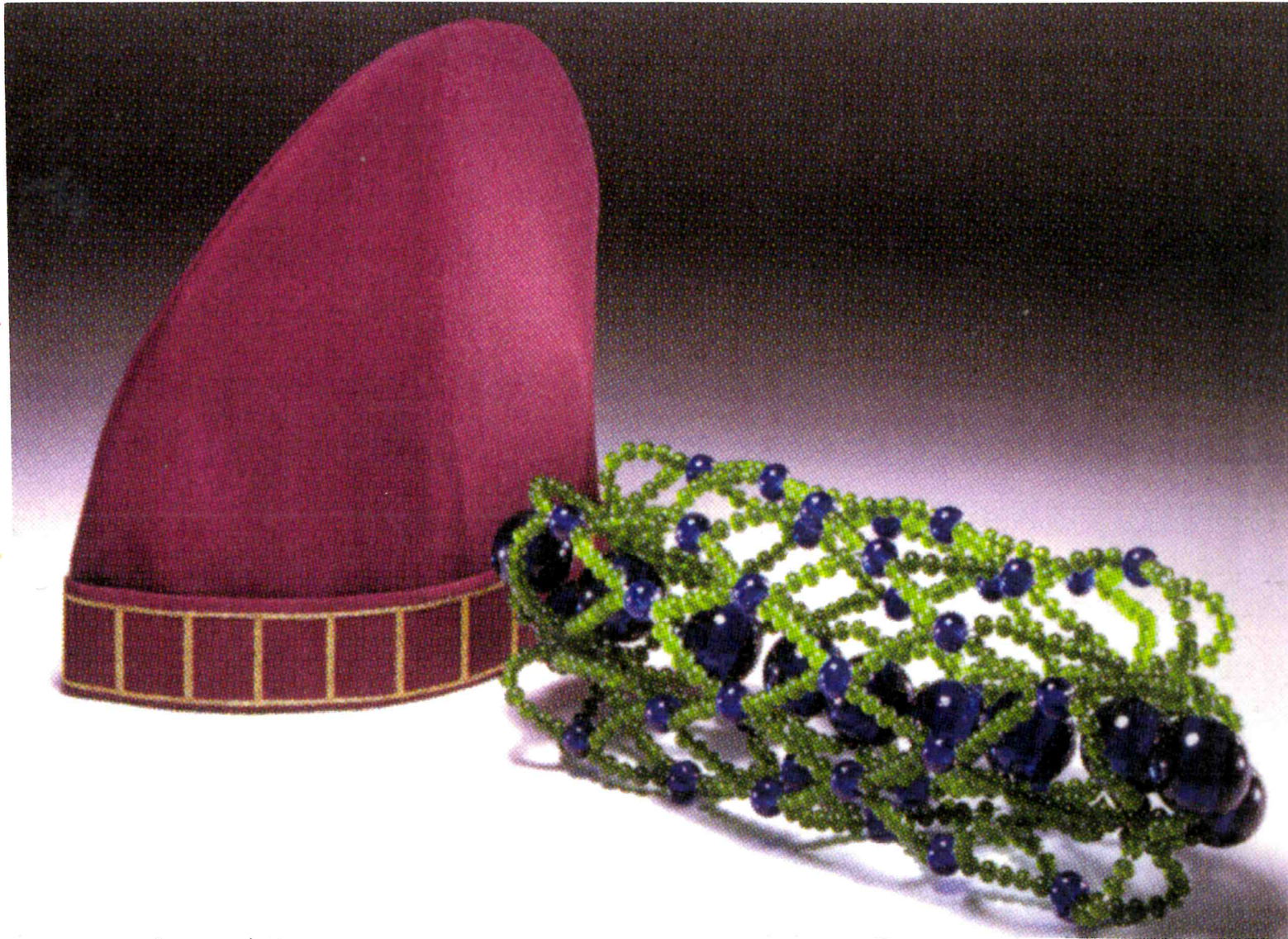
H29(2017)5.26 了解済
姉も脊椎変形
している。

中心部向け
14QG — 写真図版 739 肋骨と脊椎
中心部向け
11QG — 写真: 京都大学総合博物館

746^p

4,718^P 7/8

- ・カラー
 - ・左頁の下半分に大きく掲載して下さい。
- 限定一杯はみおせ



←
5416
ニス
カラー
西?
大カン 1476^P 玉枕
玉枕 無し
大カン 1145^P 枕
ミタ
ラ

同指輪 2976^P-3/
継体天皇陵

中心ぶりわけ
1399

中心ぶりわけ
1499

中心ぶりわけ
1199

写真図版 740 復元された冠帽と玉枕 (玉を繫いで作った枕)
所蔵・写真: 奈良文化財研究所

『いはらきの歴史を^{さぐ}探ろう』 古代編、茨木市立文化財資料館発行、5~6頁参照。(写真図版5葉共) 747^P

4,718⁰ - 8/8

- ・ カラー
- ・ 右頁の上半分に大きく掲載下さい。



136G 半字キ

142G

写真図版 741

こはれつやま

御破裂山(左の山)と

だんざん

談山神社

いのうえはてどう

奈良大和路「山」井上博道 京都書院 昭和63年8月31日発行 22頁参照

126G

談山神社は奈良県桜井市多武峰にあり、祭神は藤原鎌足、多武峰大明神、多武峰社とも呼ばれる。(広辞苑) 748^P

数え (数え年の西暦)

4718¹⁸ 12¹² 分析 1979

4.719^P-1/4

5 file 4717^P ところで 4698^P-1/2
557.6.24 4706^P 99 4706^P 99

改行

京都国立博物館長らか、
「日阿威山の墓」とは、日阿武山古墳の
ことではないか
と唱え、注目されてきた。
昭和九年の日阿武山古墳の発見
当時撮影されたX線断層写真を含むファイルが
ガラス乾板など四十枚が、この古墳の
北側にある京大地震観測所の一階資料室内で
無造作に古新聞紙にくるまれ、保管されていた。
その資料をもとに、再調査が開始された。
棺の内部写真、金系類をコンピュター分
析などで調査・検討していった日阿武山古墳X
線写真研究会は、昭和六十二年（一九八七）
十一月二日、次のように発表した。（写真図版 738
739 740 参照）
「金系は、深紫色の絹製の冠を飾った花柄
などの刺しゅうに使われる金モールで、日大
織冠（藤原内大臣の冠）以外には考えられ
ない逸品と判明。」
鎌足の数え五十六歳と符合する。身長一六四
・六のこの人骨は、のどぼとけの状態など

4718¹⁸ 12¹²

4718¹⁸ 58-6/8 749

二と

元々 石碑に白く ④ 4718^P-1/8

4,719^P-3/4 spl64717^P

肋骨 2363^P 肋骨は左も12対ある
肋骨 574^P 脊髄の第562.11.3末(下)
肋骨 1438^P 肋骨は左も12対ある
肋骨 1438^P 肋骨は左も12対ある

125 GM
左右十二対ある肋骨中の

から、五十と六十歳と推定される。

また、その遺骨のX線写真を検討したところ、

第十一肋骨は圧迫骨折したまま、左第

十二肋骨の骨折が治癒した跡もあった。その

治療状態から見る限り、骨折後、すぐ亡くなった

たわけではないか、死因はなんらかの関係

があつたかと考えられる。

高い所から落ちたのではあるまいか

という。(「朝日新聞」昭和五十七年六月二十四

日付。同六十二年十一月三日付、一面・二三

面) 同平成二十五年十二月十三日付参照)

つまり、

「細い肋骨が治って」ところから判断す

ると、即死ではない

という。

「そして又、

「人骨の下には、墓誌があるのかも知れな

い

ともいう。(末永雅雄氏)

＊

死 10月16日
55
5月

4763 天智10年8月or9月 天智天皇 霹靂 4715^P-1/2 69
917 みやまいす

4719^P-4/4

可能性 4728^P-1/2

ちあひら 致命傷 1433^P 665m

4706^P

4707^P 天智

知れないで
の出来事により、
背骨と肋骨が折れたのかも
高所から落下したとか
転倒して強打するとか
運わるく、何かのはずみで
足の上に霹靂（落雷）したとき
あるいは天智八年（六六九）秋、中臣鎌
足（家）に霹靂（落雷）したとき
奥が崖から転落するなどで、胸部を骨折す
ような事件があったのだろうか。
ともあれ、鎌足の死去（天智八年十月十六
日）の数ヶ月前、向うかの事故により、胸
椎と肋骨を折り、それが、致命傷になった
ように思われる。可能性が高そうである。

4716-1/2 11 前 2 反 18 所
 4720-1/2
 5-16 4717 669 11 才
 不比等 4305-1/2 子 659 1
 10 10
 百科 26-415 7 659 ~ 720
 19 年 581 659 ~ 720
 日本 868 658 or 659 ~ 720

■ なお、藤原鎌足が薨じた天智八年（六六九）
 十月十六日当時、鎌足の第二子日藤原
 不比等（六五八または六五九）七二〇）
 は、十一歳、もしくは十二歳の少年であつた。
 （『日本史辞典』東京創元社、藤原不比等参照）
 ■ それなのに、
 「鎌足は、子の不比等の近江の屋敷で死去
 した」とする説があるようである。（『朝日新聞』）

昭和六十二年十一月三日付、第一面の解説参照
 ■ 確証はないが、
 へ鎌足が亡くなった大宰府の邸に、
 その後、不比等が居住した。
 のかも知れない。
 ■ そこで、その当時の人々は、
 「藤原内大臣は、子の不比等の近江の屋敷
 でお亡くなりになつた」と
 と言つたのであろうと想像される。

H29(2017)6.18(日)

こう書いておかな"と、以下、二人からカリテ37ある

4,720^パ-²/₂

どう対処すべきか ④4724^パ374^パ ⑤4715^パ-¹/₂5^パ

⑥4720^パ39^パへ

⑦4716^パ-¹/₂14^パ ⑧4716^パ-¹/₂14^パ ⑨4716^パ-¹/₂14^パ ⑩4716^パ-¹/₂14^パ ⑪4716^パ-¹/₂14^パ ⑫4716^パ-¹/₂14^パ ⑬4716^パ-¹/₂14^パ ⑭4716^パ-¹/₂14^パ ⑮4716^パ-¹/₂14^パ ⑯4716^パ-¹/₂14^パ ⑰4716^パ-¹/₂14^パ ⑱4716^パ-¹/₂14^パ ⑲4716^パ-¹/₂14^パ ⑳4716^パ-¹/₂14^パ ㉑4716^パ-¹/₂14^パ ㉒4716^パ-¹/₂14^パ ㉓4716^パ-¹/₂14^パ ㉔4716^パ-¹/₂14^パ ㉕4716^パ-¹/₂14^パ ㉖4716^パ-¹/₂14^パ ㉗4716^パ-¹/₂14^パ ㉘4716^パ-¹/₂14^パ ㉙4716^パ-¹/₂14^パ ㉚4716^パ-¹/₂14^パ ㉛4716^パ-¹/₂14^パ ㉜4716^パ-¹/₂14^パ ㉝4716^パ-¹/₂14^パ ㉞4716^パ-¹/₂14^パ ㉟4716^パ-¹/₂14^パ ㊱4716^パ-¹/₂14^パ ㊲4716^パ-¹/₂14^パ ㊳4716^パ-¹/₂14^パ ㊴4716^パ-¹/₂14^パ ㊵4716^パ-¹/₂14^パ ㊶4716^パ-¹/₂14^パ ㊷4716^パ-¹/₂14^パ ㊸4716^パ-¹/₂14^パ ㊹4716^パ-¹/₂14^パ ㊺4716^パ-¹/₂14^パ ㊻4716^パ-¹/₂14^パ ㊼4716^パ-¹/₂14^パ ㊽4716^パ-¹/₂14^パ ㊾4716^パ-¹/₂14^パ ㊿4716^パ-¹/₂14^パ

と思案されたに相違ない。

う乗の切ッてゆけばよいのだらうかし

内政・外政ともに多難なこの局面を、ど

天智天皇は

を過ぎたばかりの少年である。

藤原鎌足の第二子日藤原不比等は、十歳

た

か、天智八年(六六九)十月十六日に薨

最も頼りにしていた腹心の部下日藤原鎌足

④4720^パ29^パ